

HIV/SIVキメラウイルスを用いた個体レベルにおけるHIV病原性の解明  
 速水正憲（京都大・ウイルス・病原ウイルス）、松林清明（京都大・霊長類・サル類保健飼育管理施設）

HIV病原性を個体レベルで解明するのを目的として、HIV-1由来の*env*その他の遺伝子を持ち、サルに感染するHIV/SIVキメラウイルス（SHIV）を作成し、サル感染実験を行っている。所外供給を受けたアカゲザルにはSIV/サル実験系で発症に必須であることがわかっている*nef*遺伝子を欠失したSHIV（SHIV-dn）を静脈内接種した。接種後2週目よりウイルスが分離されたが、体内ウイルス量は*nef*遺伝子を持っているSHIVより低かった。末梢血リンパ球サブセットの変動は認められなかった。抗HIV特異抗体は接種後6週目より検出され約1年後にピークとなり、その後この抗体価を維持した。なお、中和抗体については現在検討中である。CTLの検索ではEnvに対するCTL活性が認められ、またNK細胞活性も上昇していることが確かめられた。以上のことから、サルに持続感染するものの発症はみられず、ウイルスに対する液性免疫および細胞性免疫が誘導されることが観察された。このことは*nef*遺伝子がSHIV/サル実験系においても病原性に関与することが示唆される。

## 資料提供8

「霊長類血漿タンパク質の分子進化の研究」

岩崎弘充(近畿大学医学部)

## 資料提供17

「霊長類の進化に伴う乳蛋白質β-ラクトグロブリンの発現機構の変化」

東 徳洋(宇都宮大学農学部)